

楽しみ、ロコミ、踏み出し

蔵治光一郎 東京大学 大学院農学生命科学研究科附属愛知演習林 講師

[講演の概要]

私たちは、高度経済成長期以降、自然環境とのつながりをすっかり失ってしまった。材木の家には住まず、食糧は外から調達し、海岸を埋め立ててきた。森や農地や川や海岸が今、どんな状態になっているのか誰も知らず、最近はその反省からか、自然環境とのつながりを回復し、楽しみ、働きかけたいという人も少しずつ増えてきた。しかしつながりを持ちたくても、森や農地には所有者、川や海岸には管理者がいて、様々な制度、利害関係、因習、個人主義などの何重もの壁ができています。私たちは、普通の人々が簡単にありのままの自然環境とふれあうことができる工夫として「森の健康診断」という活動を始めた。この活動は土地所有制度、経済・効率優先主義、サラリーマン社会からの「踏み出し」を特徴としており、ふれあうことの楽しみ、気づきと学びを提供し、参加者はロコミで集まってくる。

今、不健康な状態にある自然環境が不健康になった原因は、人々が関心を払わなくなり、所有者、管理者の利害だけで扱われてきた（森は放置され、川や海岸は過剰に工事された）ためである。不健康な状態を放置しておく、資源としての価値が失われたり、防災上危険になったりするだけでなく、景色の美しさや生物の多様性が損なわれたり、地球温暖化の進行に寄与したりするかもしれない。不健康な自然環境を健康にするのはとても大変だが、最低限、これ以上不健康度を高めないようにするために、まずは多くの人に関心を持ってもらうことが必要であり、関心を持った人が、所有者や管理者が何をしているのか（していないのか）、資源、サービス、リスクの公正な配分が行われているかを知るための情報公開や参加、協働の仕組みを用意することが望まれる。究極的には地域に権限と財源を移譲することにより、産官学民が一体となって森川里海などからなる「地域自然環境の自治」を確立することが目標となるだろう。

[プロフィール]

東京大学大学院農学系研究科博士課程修了。博士（農学）。マレーシア・サバ州森林局森林研究所、東京大学農学部附属千葉演習林助手、東京工業大学大学院総合理工学研究科講師等を経て現職。専門は森林水文学、地域森林の自治、河川・流域圏ガバナンス。著書・編著・訳書に『緑のダム』（築地書館、2004）『森の健康診断』（築地書館、2006）『水の革命』（築地書館、2008）など。